



小児科医と育児指導の 役割について

日本小児科医会 会長
内藤 壽七郎

400年以上前になるが、日本に来航したフランシスコ・ザビエル一行の目には日本人は子育てが上手で親子関係が親密であることが驚異として映ったらしいことが歴史にうかがえる。

封建時代の日本は子供の数は決して多くなかった。人口増加を調節するために、表面に現われない人口増加抑制の手段はとられていたが、いったん「家」を維持するために必要な子となると、大切に育てた。外国人はムチも使わずに上手に育てていると感心したことであろう。封建的な江戸時代が終わって明治、大正と子供の数が増えても子供は神の子、授かりものとして大切に育てられてきた。しかし、育児についての第一線の小児科医との係わり合いは、ほとんど皆無に等しいものであった。小児科医は伝染病や感染症の治療に追われて、育児の指導はできなかった。

大正末期から昭和初期にかけてようやく、わが国にも衛生統計などが行われるようになり、乳児死亡率も当時のいわゆる文明国と称せられた国々の中で著しく高値であることが明らかになった。乳児死亡の原因は、先天性弱質が第一、次に肺炎、第三に下痢腸炎とされ、これらについて対策が講ぜられるようになった。早期発見、早期治療、さらに予防策が考慮されるようになり、小児保健に関心を持つようになった。また伝染病の予防が徹底するにつれ、ジフテリアはおろか、百日咳の実際をも知らない医師も現われるまでになってしまった。

しかし小児科を志した医師は意識していなくても、心の中には小児保健的なあるいは子供を育てる心を持っている。ところが小児科医の主力が疾病診療に向けられて、その育てる心を積極的に顕示する暇がなかったのがこれまでの現実であった。今ようやく育児指導に真剣に取り組むときが来たというべきである。

今わが国は、5人の働き手が1人の老人の年金を産出しているといわ

れている。ヨーロッパ諸国の2～4倍の速度で高齢化社会に突入しようとしている日本はまもなく、3人で1人の老人を支えなくてはならない。

この問題の解決策としては、出生数を増やす対策とともに、1人の働き手が1倍半以上の仕事効果をあげてもらう他はない。このためには出生時から乳児、幼児、学童、前成人期を通じて一貫した、しかも充実した育児指導が行われなければならない。この新たな役目を担うのが小児科医であろう。今すぐやれることは、小児科医による一貫した、しかも充実した育児指導によって、より強い身体、精神的能力を持つ人間を育てるよう国と一体となって取り組むことではあるまいか。

一般に小児科医の収入は他科に比べて最低である。このことは、日本もアメリカもこの数年続いている。しかし“かね、カネ、金”と一億総金色夜叉かと思われるときに、ある大学では12～13人に及ぶ小児科入局希望者があると聞いた。有難い、日本未だ減びずとの感を抱かせた。その若者たちは医というものの心を強く持っていてくれるから、金銭的には明らかに不利な小児科をあえて志してくれたのではあるまいか。

その素晴らしい若者の期待に応えるべく先輩として小児科医による育児指導という国として、民族として大きな仕事のあることを示さなければならないのではあるまいか。

